

後藤和民さんとの出会いと別れ

熊野 正也

月日の経つのは早いものである。後藤和民さんが逝ってすでに1年にもなろうとしている。その間、3月には「後藤さんを偲ぶ会」が母校の明治大学リバティ・コモンで開催され、私もまた多くの友人、諸先輩ともどもお別れをしたつもりでいた。しかし、なぜか私にとって後藤さんの死は、未だ実感として湧かない。女々しいといわれるかもしれないが、今にも後藤さんがひょっこり顔を出し「よ！熊さん」と声をかけてくれるような気がしてならない。それは後藤さんと私とは半世期以上もの長き付き合いがあったからであり、仕事面をはじめもろもろのことについて忌憚のない話しができる兄弟にも等しい間柄だった。

そもそも、私と後藤さんとの最初の出会いは、1960(昭和35)年2月の明治大学文学部史学地理学科考古学専攻受験の日に遡る。かれこれ50年以上も昔のことになってしまった。受験の席順は偶然にも後藤さんとは隣同士だった。

10数年前のある集まりの時、後藤さんから当時の受験のことに触れ、おもむろに「君は確か試験開始から30分も遅れたよな！」といわれ、びっくりしたことを覚えている。なぜ、お互いに名前も知らない同士が、田舎からはるばる上京した坊主頭の一受験者のことを覚えていたのか、驚きもあったし感心もしたのだった。

私も実は後藤さんのことを覚えていた。痩せ形の後藤さんは、グリーン系の上下揃いのスーツにきっちりとネクタイをし、皮製の手提げカバンを手に、姿勢正しくさっそうと歩いていたこと、そして、頭はボマードできれいに整え、また試験開始前と終了後には、たばこを吸っている人であった。どうみてもわれわれとは同年輩とは思えない。後で知ったことだが、なんと10歳も年上だった。特に田舎者にとっては、「え！」なんてこういう人と一緒に受験するのという一瞬驚きにも似たような気持ちを持ったことは事実だ。

1960年4月、幸いにも二人は無事この考古学専攻に合格することができた。しかし、一年生の時は、まったくといってよいほど後藤さんとは、会話を交わした記憶がない。翌年の考古学実習という一週間の発掘でたいへんお世話になったことを覚えている。われわれにとっては、初めての発掘調査である。その実習場所は千葉県市川市の鳴神山という遺跡であった。調査には、杉原荘介先生をはじめとして大塚初重先生、戸沢充則先生の引率のもとに、3・4年生の諸先輩も指導者として加わり、全員が地域の公民館で合宿した。お風呂は近所のお宅でお世話になり、はじめての五衛門風呂も経験もした。

日中は発掘作業で汗をかき、夜は夜で日本酒を飲んでその疲れをいやすという日々であった。しかし、当時の私はほとんどお酒を飲めなかった。先輩に勧められて、確か1杯の味噌汁椀に注がれたお酒を飲み、夜通し後藤さんに介抱されたこと覚えがある。当然ながら翌日は二日酔いである。

その姿を見て後藤さんは、某先生に「熊野が二日酔い」なので、午前中だけでも発掘を休ませていただきたいと申し出てくれたのである。結論的にいえば、その申し入れは即座に却下されたそうだが、その時の後藤さん対しては単なる同級生以上の兄貴みtainな親しみを感じたものである。それをきっかけに、私

最前列左から

4人目 杉原荘介先生

5人目 戸沢充則先生

後から3列目左から

2人目 (故) 後藤和民氏



1961年5月 千葉縣市川市・鳴神山遺跡での考古学実習

は後藤さんと親しく会話を交わすことになった。

それにしても発掘時の後藤さんは、馬力があつた。私も小学校の4年生から高校時代まで柔道をしていて、体力には自信があつたが、その私ですら後藤さんには一目をおいたものである。その後、後藤さんは、縄文時代の研究を目指し、私は大塚初重先生の指導を受けながら、古墳時代の土器について勉強することとなって、専門を異にすることになった。だが1部・2部合わせて僅か20数名の同級生である。専門を異にすれども同級生としての絆はますます深まって行つた。

やがて、1964年にわれわれ同期は大学を卒業し、そのうち5人が大学院に進学することになった。この中には後藤さんも私もいた。指導教員は杉原荘介先生であつた。

この年、日本考古学協会に加曾利貝塚調査特別委員会が組織され、加曾利南貝塚の発掘調査が実施される運びとになった。調査団は団長・早稲田大学の滝口 宏先生、副団長・慶応義塾大学の清水順三先生と明治大学杉原荘介先生という形で構成された。これには多くの日本考古学協会の会員らも参加するなど、いままでに例のない大々的な調査組織となった。

われわれ明治大学大学院生も杉原先生の命により、10数名の学生のまとめ役としてこの発掘調査に参加することになった。この調査で、他大学の多くの大学院生や学生たちとも知り合うことができたことは幸いであつた。この大所帯の調査を円滑に進めるために、千葉市教育委員会の職員等で組織された事務局が置かれ、副団長の杉原先生のご下命によりこの中に縄文を専門とする後藤さんも囑託として加わることになったのである。

このことは、後に後藤さんが千葉市教育委員会に入る直接のきっかけとなったことも事実である。それにしても後藤さんは、調査団が円滑に運営されるよう積極的に働いてくれた。われわれがしでかした失敗や学生のいたずらについても、いつもわれわれをかばい、矢面にたつて杉原副団長の小言を一人で受けてくれたところを何度か目にしたことがある。

大学院2年生の夏休みが終わった頃の授業だったと思う。杉原先生から「後藤君よ君は、加曾利貝塚の仕事については誰よりも知っているし、関わりも深いので、千葉市に就職したまえ！」とのご下命があり、ついでに「熊野、君は下総国分寺跡の発掘等で市川市との関わりがあるので、市川市に就職するように」とのこれまたご下命があった。当時の杉原先生のご下命には後藤さんも私も逆らえなかった。その頃の世は、日本経済成長期の真ただ中にあり、加えて田中角栄首相の日本列島改造論で山地という山地は次から次へと開発の手が伸びていた。一方では、埋蔵文化財の危機に瀕した時でもあり、私たち二人は千葉県内市町村の文化財担当として配属されるはしりともなった。

このように後藤さんと私とは、単に同級生という結びつき以外にも、千葉市と市川市との同じ地方公務員の立場であるということ、博物館や文化財保護という共通の仕事に就いていたということもあって、月に一度会い、情報交換をする機会を作っていた。会う場所は、千葉と市川のほぼ中間の船橋ということにしたのである。後藤さんは、考古学や博物館について、あるいは行政についても、独特の哲学をもっていた人で、仕事には忠実であった。私は彼にどれほど啓発されたことか計り知れないものがあった。今でも感謝の念に堪えない。

やがて、後藤さんは加曾利貝塚博物館長を最後に千葉市を定年退職され、創価大学教育学部教授として招かれた。教員時代の後藤さんは、教授、特任教授合わせての15年間も教育に携わった。授業は後藤独特の教授法で多くの優秀な学生を育てた。現在、その後藤イズムを受け継いだ卒業生たちは各地で文化財保護行政や博物館行政の上でおおいに活躍している。

その後藤さんが、胸部動脈りゅうの手術を受けるために、東京大学附属病院に入院する3日前のことであった。つまり、2009年10月16日のことである。「逢いたい」という電話があった。大手術の前で心細いだろうと思い、同期生の川上 元君、それに加曾利貝塚博物館時代に後藤さんから指導受け、考古学の道に進んだ阿部芳郎明治大学文学部教授も誘い、4人で船橋東武デパートの8階の「日本そばや」で会うことにした。

4人で顔を合わせた時、それはそれはとてもうれしそうだった。いつものように、にこやかに微笑みながら、ある時は大笑いをし、普段とは変わらぬ雑談に終始した。後藤さんはわれわれにあまり心配かけまいとしてか、ほとんど手術のことについては触れることがなかった。

われわれは「手術の成功と早く退院すること」を願い、それじゃ秋田の名酒高清水の熱燗で乾杯しようということになった。

後藤さんには悪かったがこれから入院する人に飲ませるわけにはいかないからといったところ、寂しそうに「おいおい。僕にも飲ませてよ！」というものだから、それでは少しだけという条件で、4人で乾杯したのであった。その直後のことである。やや間をおいてから「ひょっとしたら、これが君たちと今生の別れになるかもしれないからなあ」という言葉をボロリとこぼしたのである。一瞬、その場の雰囲気は、時間が止まったような静けさになったが、咄嗟に私は、語気を強めながら、そんな縁起でもない冗談はいうなといったことを覚えている。

後藤さんが亡くなるということの想像すらしなくなかったのに、それが3週間後に現実になるとは。11月9日の朝8時ちょっと前に後藤夫人から電話口で「後藤が昨晚の8日午後6時に亡くなりました」と聞き、ただ呆然としてしまってなにも考えられない。頭の中が真っ白になるとはこういうことなんだ。

連絡を受けた私は、その日後藤さんの遺体が自宅へ戻る時間を見はからい、上田市の川上 元君と桜木

町を訪ね、変わり果てた姿であったが、やすらかに眠っている後藤さんと対面することができた。しかし、ここで改めて後藤さんの几帳面さを知ることになった。それは遺言状が用意されていたことであった。遺言状は、いつもかばんの中にいれてある小さな200字詰め原稿用紙であった。5～6枚であったろうか、いつものきちとした文字で、ご遺族に迷惑をかけないような配慮がありありとわかる内容であった。最後の最後まで冷静にふるまった後藤さんの生きざまは、私のような凡人にはまねができない。

後藤さんの歩んできた公務員や教員として道のりは、実に険しいものであったろう。しかも、彼は仕事上での妥協は絶対しない信念の人であった。それだけ、誤解されたことも多くあったと思う。しかし、後藤さんの遺跡保存思想は、単なる口先ではなかった。行動が伴ったことであった。多くの文化財担当者たちには勇気を与えてくれた。現在、千葉県は全国でも有数の遺跡保存が行われている地方自治体として知られるが、これに果たした後藤さんの役割には計り知れないものがあつた。

やはり、後藤和民さん、あなたは、凡人ではなかった。地域学にあつても考古学にあつても、また遺跡保存にあつても、また大学教育にあつても実に大きな存在の人であった。おそらく、これからも後藤さんみたいな人材は、現れることがないであろう。合掌。2010・9月7日記す

(特定非営利法人博物館活動支援センター 副理事長)